

浅見遺跡

団体営日光道東地区土地改良総合整備事業

に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

序 文

平成 4 年より事業開始となった団体営日光道東地区土地改良総合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成 5 年の 1 月～3 月に「日光道東遺跡」を実施し、平成 6 年 3 月には、報告書を刊行致しました。「浅見遺跡」は平成 5 年 11 月～12 月に発掘調査を実施し、平成 7 年 3 月に報告書の刊行となり、本事業に伴う埋蔵文化財関係の業務を終了致します。

末筆ではありますが、調査にご協力して頂いた方々、ご指導を頂いた方々に心より感謝申し上げ序文と致します。

平成 7 年 3 月

大胡町教育委員会

教育長 犀持 平三郎

例　　言

- 1 本書は、平成5年度群馬県勢多郡大胡町河原浜地内に於ける団体営日光道東地区土地改良総合整備事業に係る「浅見遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 「浅見遺跡」は群馬県勢多郡大胡町大字河原浜字浅見1299番地外に所在する。
- 3 発掘調査は、平成5年11月8日から同年12月27日まで行った。
- 4 発掘調査費用及び整理事業は、総額の内72%を農政部局、残り28%を文化財補助事業として対応した。
- 5 発掘調査及び整理事業は、大胡町教育委員会が直営で実施し、山下歳信が担当した。調査組織は、次のとおりである。

事務局 教育長 翁持平三郎

社会教育課長 井上敬雄

課長補佐 真藤 孝

調査担当主査 山下歳信

主任 藤坂和延

主事 小沼安美

- 6 本書の作成は、編集・執筆を山下が担当した。
- 7 発掘調査において出土した遺物については、全て大胡町教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査、整理に当たっては、下記の方々並びに関係機関のご協力、ご教示を頂いた。記して感謝いたします。(順不同、敬称略)群馬県教育委員会文化財保護課 大胡町土地改良課 勢多郡社会教育文化財分会の諸氏 (株)測研 技研測量設計(株) 須賀建設(株)
- 9 発掘参加者並びに整理参加者(順不同、敬称略)
阿久沢福造 井上美代子 石井よね 大原きみ子 小沢チヅエ 菅田ツル 高橋充子 喜楽トヨ
木村かね子 勅使川原幸枝 登坂うた子 萩原秀子 関谷清治 五十嵐文江 山下雅江 福島逸司
中村新太郎 横沢和代 横沢恵子 鈴木久美子 和田マツエ 藤川敏枝

凡　　例

- 1 遺構の略号はつぎのとおりである。 H 積穴住居跡 D 土坑 E 井戸
- 2 捜査図版の縮尺は、全体図—1/1200 住居跡—1/60 カマド—1/30 土坑—1/40
井戸—1/40 土器—1/3~2/3
- 3 遺構検査中に示したN方向は、座標北である。

目 次

序 文
例 言
凡 例
本 文

第1章 発掘調査に至る経緯と概要	1
第2章 調査の記録	3
平安時代の遺構と遺物	7
第3章 調査の成果と今後の課題	16
写真図版	

搜 図 目 次

第1図 浅見遺跡の位置図	第2図 浅見遺跡全体図
第3図 繩文時代の遺構分布図	第4図 繩文時代の住居跡、土坑
第5図 繩文時代の土坑、遺物	第6図 平安時代の住居跡(1)
第7図 平安時代の住居跡(2)	第8図 平安時代の住居跡(3)
第9図 平安時代の住居跡(4)、井戸跡	第10図 平安時代の鍛冶関連遺構
第11図 平安時代の出土遺物	第12図 天王山地区表採遺物

写 真 図 版

P L 1	1 遺跡全景（南より）	2 A調査区全景
P L 2	1 試掘風景（西より）	2 1号住居跡 3 1号住居カマド跡 4 2号住居跡
	5 2号住居カマド跡	6 5、6号住居跡
P L 3	1 10号住居跡遺物出土状況	2 10号住居跡環出土状況
	3 1号住居跡	4 12号住居跡
	5 鍛冶関連	6 12号土坑遺物出土状況

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯と概要

発掘調査に至る経緯

平成4年度より開始された団体営「日光道東地区土地改良総合事業」は、東は能満寺川、西は県道上神梅・大胡線、南は上毛電鉄、北は勢多郡宮城村に挟まれた区域で、大胡町大字河原浜地内の東部に位置する字日光道東・浅見地区と大字樋越字天王山地区が該当地域である。平成4年度には字日光道東の発掘調査(1)を実施し、旧石器時代の遺物としては細石核・ナイフ形石器・槍先形尖頭器・削器などが出土。縄文時代では円形土坑と落し穴を検出。平安時代の遺構は竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などがあり、中近世では古墓と溝状遺構を確認した。

平成5年度は、事業対象地域である浅見地区と天王山地区の切土部分と新設道路部分に試掘調査を行い、試掘結果に基づき確認された遺構の記録保存を目的とする発掘調査を実施した。

(1) 日光道東遺跡 団体営日光道東地区土地改良総合事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I -1994

発掘調査の概要

浅見遺跡は、東を能満寺川、西を西能満寺川に挟まれ、日光道東遺跡とは西能満寺川を挟んで南方約350mの台地に位置する。発掘調査区域は、浅見地区的切土部分と新設道路部分を対象とし、表土は掘削用重機で除去した。調査の実施にあたっては、調査区をA～F区に分けた。

A調査区は、南北に伸びる標高180mから177mの緩慢な台地平坦部で、西方に西能満寺川が流下する低地が広がり、北方は高燥台地が広がる。調査区の中央から南東部にL字形に50cm前後の段差を設けているカット面が見られる。遺構は、このL字形カットライン、カット面に集中して検出された。同調査区では、縄文時代の住居跡2軒、円形土坑7基、落し穴2基、平安時代の住居跡9軒、井戸跡2基、小鍛冶に拘わる炉址と土坑等が確認された。

B調査区は、A調査区に併走する新設の道路部分に該当する調査区で、南部が谷地となる。中央部にA調査区から続くカット面が見られ、平安時代の竪穴住居跡2軒が検出された。

C調査区は、B調査区にはほぼ直角に設けられる新設道路部分で、西方の谷地部から台地の中央部に移行している。遺構・遺物は検出されなかった。

D調査区は、既存の道路の拡幅部分の調査区で、平安時代の竪穴住居跡1軒を検出した。

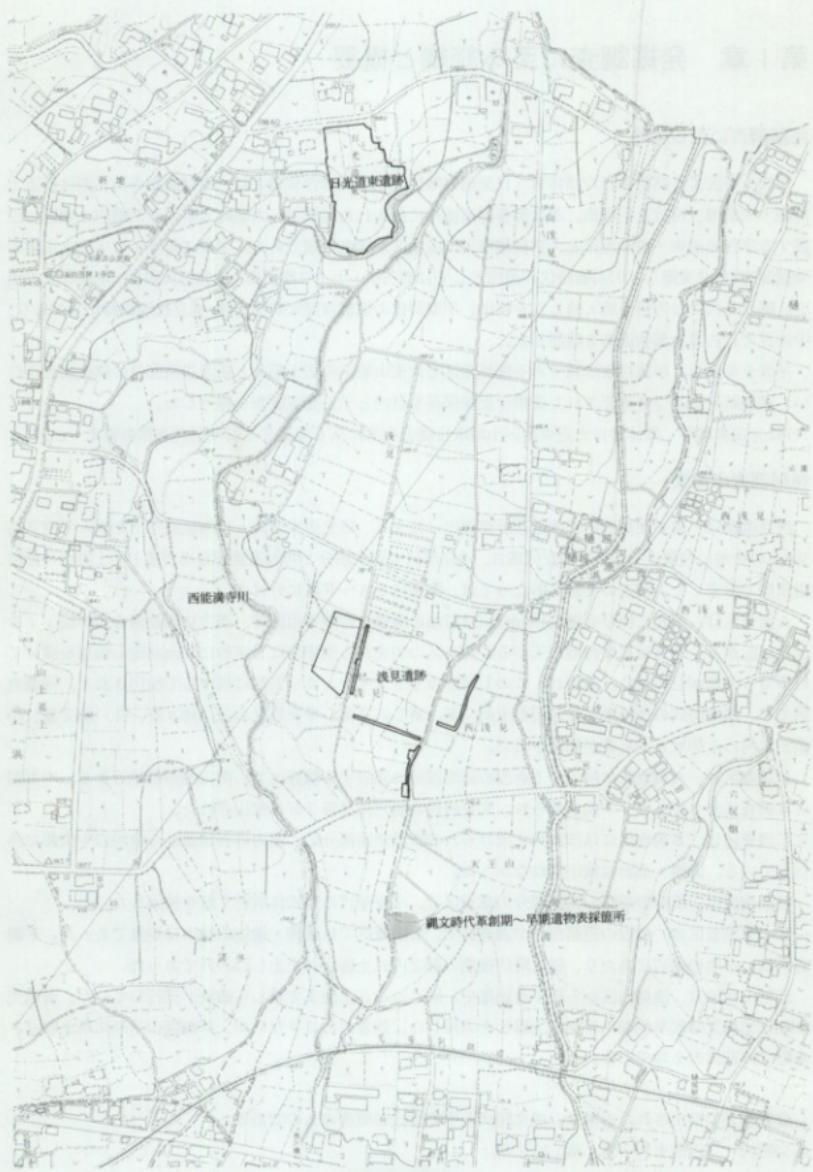
E・F調査区は、新設の道路部分の調査区で、E調査区では遺構・遺物の検出は皆無であった。F調査区は、台地の縁辺にあたり、縄文時代後期の堀之内式土器片が出土したのみであった。

天王山地区は、浅見地区から続く台地部で、既にローム上面まで著しく破壊が進行していた。台地先端部にて縄文時代草創期～早期の土器片を表探した。数量的には少ないが、草創期の爪形文系土器は、本町では初見のものである。

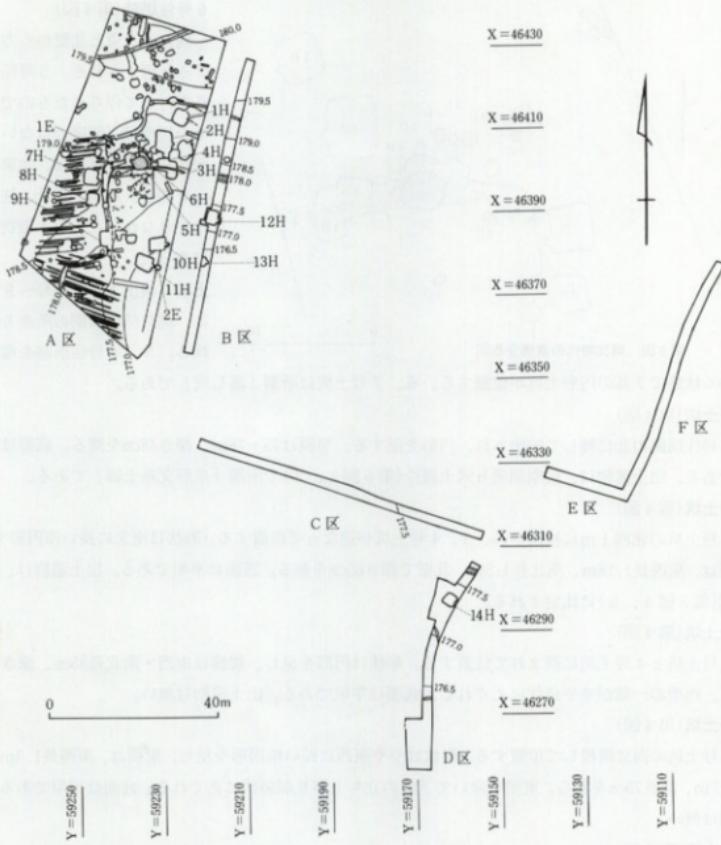
発掘調査で検出された遺構は、縄文時代と平安時代の所産のものである。

縄文時代 円形土坑7基 落し穴2基

平安時代 竪穴住居跡14軒 井戸跡2基 鍛冶関連遺構



第1図 位置図



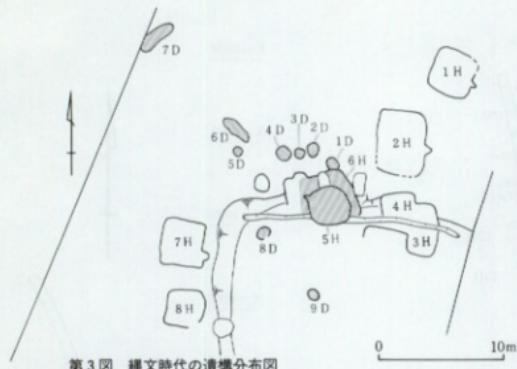
第2図 全体図

第2章 調査の記録

第1節 繩文時代の遺構と遺物

5号住居跡(第4図)

A調査区のはば中央に検出され、6号住居跡と重複する。形状は円形気味を呈し、6号住居跡を切って構築されている。規模は、3.15~3.2mを測る。確認面からの掘り込みは最も深い北壁中央で47cmを測る。周溝は東壁沿いにあり、幅10cm前後、深さ2~3cmと浅い。床面は、ほぼ平坦である。柱穴状掘り込みは3カ所に検出されたのみである。炉址の存在は確認できなかった。遺物は、南東部で床面より20cm浮いた状態で深鉢形土器の口縁部片(第5図1)が1点出土した。



第3図 縄文時代の遺構分布図

6号住居跡(第4図)

残存する東と北壁から方形を呈すると考えられる。5号住居跡より先行して作られたものである。その規模は、明確ではない。確認面からの掘り込みは、北東部で40cmを測る。周溝、炉址、柱穴は検出できなかった。出土遺物も皆無であった。

土坑 検出された1号～9号土坑は、縄文時代前期の所産と考えられる。5、6号住居跡を環状に取り巻く状態で7基の円形土坑が位置する。6、7号土坑は所謂「落し穴」である。

1号土坑(第4図)

6号住居跡の北に接して検出され、円形を呈する。規模は75～78cm、深さ48cmを測る。底面はほぼ平坦である。出土遺物は、前期諸磯b式土器片(第5図2、3)で所謂「爪形文系土器」である。

2号土坑(第4図)

1号土坑の北西1mに検出され、3、4号土坑が連なって位置する。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は、東西長1.18m、南北長1.3m、北壁で深さ65cmを測る。底面は平坦である。出土遺物は、前期黒浜式(第5図4、5)に比定される。

3号土坑(第4図)

2号土坑と4号土坑に挟まれて位置する。形状は円形を呈し、規模は東西・南北長85cm、深さ44cmを測る。西壁の一部がやや袋状にえぐれる。底面は平坦である。出土遺物は無い。

4号土坑(第4図)

3号土坑の西に隣接して位置する。形状はやや東西に長い楕円形を呈し、規模は、東西長1.3m、南北長1.2m、深さ75cmを測る。東壁を除いて下部の立ち上がりが袋状にえぐれる。底面は平坦である。出土遺物は無い。

5号土坑(第5図)

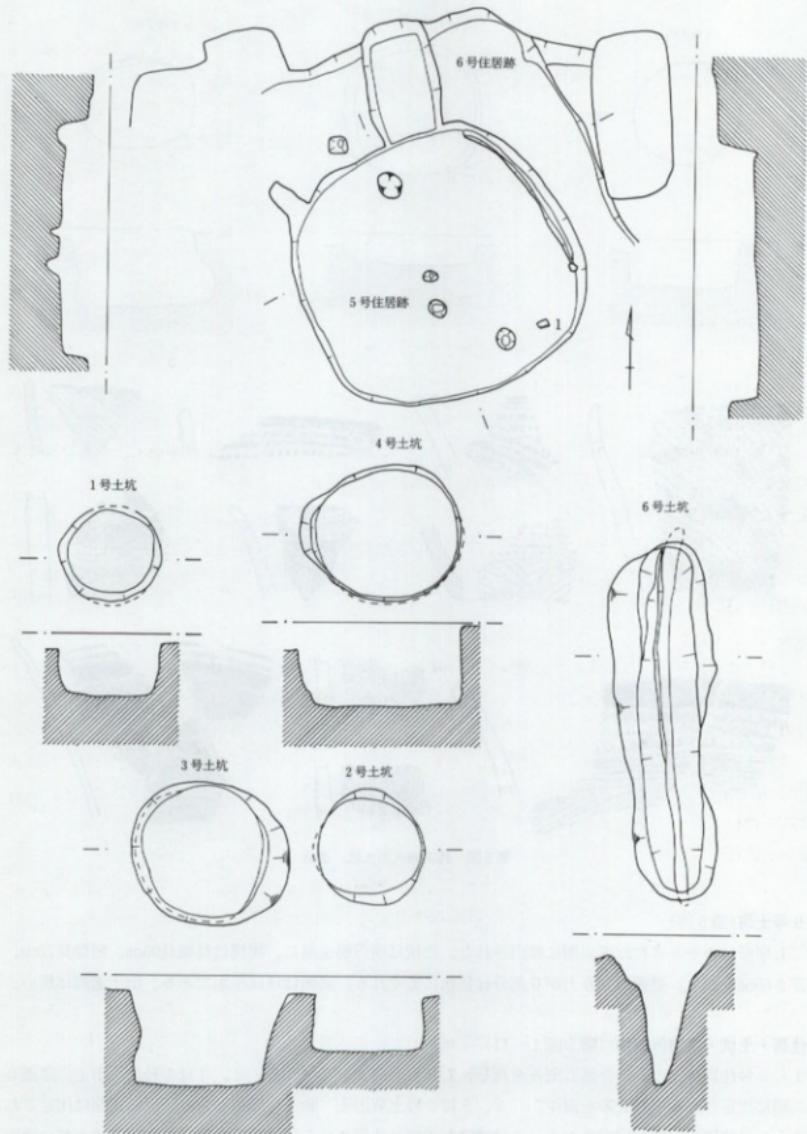
4号土坑の西3.5mに位置する。形状は円形を呈し、規模は、東西長84cm、南北長88cm、深さ37cmを測る。東西壁の下部が袋状にややえぐれる。床面は平坦である。出土遺物は無い。

6号土坑(第4図)

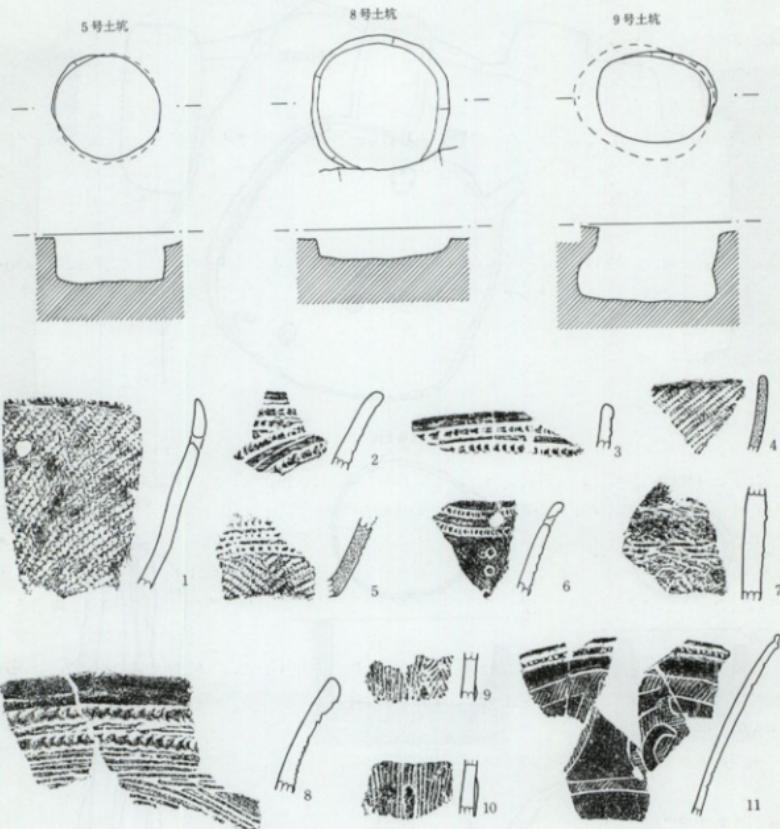
5号土坑の北方、標高179mに位置する。形状は長楕円形を呈する落し穴で、短軸の断面形は薬研状とし、長軸の両端が袋状とする。規模は長軸長2.9m、短軸長65～85cm、深さ1.1m前後を測る。底面は、10cm前後の幅である。長軸方向はN45°Wである。出土遺物は無い。

8号土坑(第5図)

L字状カットのコーナー部に検出され、南部分が溝状の掘り込みによって破壊されている。形状は円形を呈し、規模は東西・南北長1.1m、深さ16cmを測る。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。



第4図 縄文時代の住居跡、土坑



第5図 繩文時代の土坑、遺物

9号土坑(第5図)

L字形にカットされた平坦面に検出された。形状は梢円形を呈し、規模は長軸長95cm、短軸長72cm、深さ60cmを測る。壁面の立ち上がり部分は袋状にえぐれる。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

住居・土坑・遺構外遺物（第5図1～11）

1～5号住居跡出土。口唇部に刻みを施し、LR Lの縄文を充填する。2、3は1号土坑出土、諸磯b式期に比定される爪形文系土器片。4、5は2号土坑出土。胎土に纖維を含む。黒浜式期に比定される。6は諸磯a式期に比定される。7は諸磯b式期に比定される浮線文系土器。8は浮島式土器に比定される。9、10は諸磯c式期。11はF調査区出土の後期堀之内式期に比定される。

平安時代の遺構と遺物

1号住居跡(第6図)

本遺跡A調査区の最北に検出され、台地の平坦部標高179mに位置する。北東コーナー部、カマド前面などに擾乱が認められる。形状は隅丸方形を呈し、規模は、東西長3.75m、南北長3.5mを測り、主軸はE 27°S にとる。確認面からの掘り込みは25cm前後で、緩やかに東傾斜する床面である。周溝は、北壁の西半分に検出された。柱穴状掘り込みは、南壁中央やや東寄りにP1がある。30cmほどの円形で深さ24cmを測る。貯蔵穴は、南東隅に検出され、規模は、40×35cmの南西部がやや突出する円形で深さ21cmを測る。

カマドは、東壁中央付近に礫と灰褐色粘土で構築されている。焚口部は壁の内側にあり、燃焼部は舌状に東に張り出す。焚口から煙道部まで73cmを測る。出土遺物は、須恵器壺と土師器甕の小片だけであった。

2号住居跡(第6図)

A調査区の標高178.50～178.80mの平坦部に検出され、北東に1号住居跡、南方には3、4号住居跡が位置する。形状は、南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は、東西長5m、南北長3.95mを測り、主軸はE 6°S にとる。確認面からの掘り込みは、東壁部で33cmを測る。床面はほぼ平坦で、北方には炭化材が残る。周溝は、カマド右袖部から南壁部を除き連続する。その規模は20cm前後幅、深さ8cmの逆蒲鉾状を呈する。貯蔵穴が存在すると考えられる南東部には、長方形の擾乱が見られる。柱穴状の掘り込みP1は、25×28cmのやや歪んだ円形で深さ20cmを測る。外の掘り込みは、覆土から住居跡より後出のものと考えられる。

カマドは、東壁中央やや南寄りに礫と灰褐色粘土によって構築されている。焚口部は壁の内側にあり、燃焼部は東に隅丸方形に張り出す。袖部は壁ライン上にあって袖石と天井石が認められる。焚口から煙道部まで93cmを測る。

出土遺物は、カマド内よりコの字口縁を呈する甕の破片がある。

3、4号住居跡

2軒の住居跡が重複するがL字形カットによってその中央部が破壊されている。3号住居跡は東と北壁部の一部と周溝を検出した。確認面からの掘り込みは北壁部で37cm、周溝は幅20cm、深さ7cmを測る。

4号住居跡は、北方の半分ほどが残存する。確認面からの掘り込みは、北壁中央で46cmである。出土遺物は、須恵器壺と土師器の甕の小片であった。

7号住居跡(第7図)

標高178.50～179m間の平坦部に検出され、形状はやや南北に長い隅丸方形を呈する。主軸は、E 6°S を呈する。規模は東西長3.45m、南北長3.7mを測る。確認面からの掘り込みは、11～14cmを測る。床面は、中央部がやや高まる。周溝、柱穴状掘り込みは検出できなかった。南東コーナー部の掘り込みは、75×90cmの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。底面の南には15×20cmの隅丸方形で深さ10cmの掘り込みを設けている。カマド前面にも80×90cmの円形で深さ20cmの掘り込みがある。

カマドは、東壁の南よりに礫と灰褐色粘土で構築されている。焚口は壁の内側に設けられ、燃焼部幅45cm、焚口から煙道部まで95cmを測る。

遺物は、カマド内と覆土中より土師器の壺片と羽釜の口縁部片などの小破片がある。

9号住居跡

L字形のカットラインの南方に検出されたが、その東の大半はカットされている。標高178m前後に位置する。形状は、隅丸方形を呈すると考えられ、残存する南北長は、3.4mを測る。確認面からの掘り込みは、西壁中央で35cmを測る。床面はほぼ平坦で、周溝は検出されなかった。柱穴状掘り込みは、3カ所確認された。25×30cmの円形で深さ15cm、35×45cmの楕円形で深さ20cm、32×40cmの楕円形で深さ40cmを測る。

10号住居跡(第7図)

A調査区の南東部、標高177m付近の平坦面に検出され、南西に11号住居跡が隣接する。形状は、東西に長い隅丸長方形を呈し、規模は東西長4m、南北長3.1mを測る。確認面からの掘り込みは、残存の良い西壁中央で25cmである。床面は、やや東傾斜を呈している。周溝、柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に位置し、35×37cmの方形で深さ22cmを測る。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに礫とにびい暗褐色粘土で構築されている。焚口は壁より内側に50cmほど張り出して設けている。燃焼幅40cm前後、焚口から燃焼部まで1.25mを測る。

遺物(第11図1~7)は、西方の床面、北方中央の床面、貯蔵穴に壺などが出土している。

11号住居跡(第8図)

A調査区の最南東の平坦面に検出され、カマドの東には、2号井戸跡、北東には10号住居跡が隣接する。形状は、北東部がやや突出する方形を呈する。規模は、東西長3.9m、南北長3.4mを測り、主軸は、E 15°Sをとる。確認面からの掘り込みは西壁で25cmを測る。床面は、緩やかに東傾斜をしている。周溝、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴状掘り込みP1は、円形を呈し、40cm前後の径、深さ25cmを測る。カマドは、東壁の中央やや南寄りに礫と灰褐色粘土によって構築され、舌状に張り出す。右袖石は外されている。焚き口から煙道部まで75cmを測る。遺物は2点の墨書き土器(第11図8、9)などがある。

12号住居跡(第8図)

B調査区の中央やや南、標高177~177.5m間に検出され、北方にはA調査区のカット面、南方には13号住居跡が位置する。形状は、やや南北に長い隅丸方形を呈し、規模は東西長2.8m、南北長3.56m、主軸は、E 21°Sをとる。確認面からの掘り込みは、25~35cm前後を測る。床面は、南東部方向に高まる。周溝は、カマド前面を除いて連続する。規模は、10~25cm幅で、深さ3~10cmを測る。貯蔵穴は南東隅に検出され、45×60cmの楕円形で深さ17cmを測る。柱穴状掘り込みP1は、20cm前後の円形で深さ10cmを測る。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに僅かな礫と灰褐色粘土によって構築されている。焚口は壁より内側に設け、燃焼部と煙道部は舌状に東に張り出す。焚口から煙道部まで95cm前後を測る。

遺物は、貯蔵穴上面で土師器の壺片が出土した。

14号住居跡(第9図)

D調査区に検出され、形状は隅丸方形を呈している。規模は東西長2.75m、南北長2.85m、主軸E46°Sをとる。確認面からの掘り込みは、残存の良い西壁中央で23cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。周溝はカマド前面を除いて連続している。規模は、10~15cm幅、深さ5cm前後を測る。貯蔵穴は、南東隅に検出され、40×50cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。

カマドは、東壁中央やや南寄りに礫と灰褐色粘土で構築されている。焚口は壁の内側に設け、袖石を構えている。焚口から煙道部まで83cmを測る。遺物は、カマド内に集中して出土。

1号井戸(第9図)

6号住居跡の西方に検出された。形状は、梢円形を呈し、規模は、長軸長1.4m、短軸長1.15m、深さ2.58mを測る。底面は42×36cmの梢円形を呈している。上位はややロート状に開き、中位に弱いあぐりの部分が見られ、下位は円筒形を呈する。出土遺物は無い。

2号井戸(第9図)

12号住居跡のカマド煙道部に接して検出された。形状は、梢円形を呈する。規模は、長軸長1.52m、短軸長1.32m、深さ1.62mを測る。中位に部分的にあぐりが見られる。出土遺物はない。

鍛冶関連遺構(第10図)

A調査区のL字形カット面の西辺に検出された。このカット面は、鍛冶作業にかかわる為に作り出された可能性が考えられる。検出された遺構は、鍛冶炉、鉄滓が下部に充填された10・11号土坑、羽口を伴う12号土坑があり、周辺には小柱穴群が見られた。

鍛冶炉

東西にやや長い梢円形を呈する。規模は東西長24cm、南北長19cm、深さ22cmを測る。覆土は焼土粒とローム粒を含む黒褐色土である。壁面の上位は著しく焼土化し、南西の周縁は青白く還元され、北西部を除いて3~9cm幅で焼土化している。

10号土坑

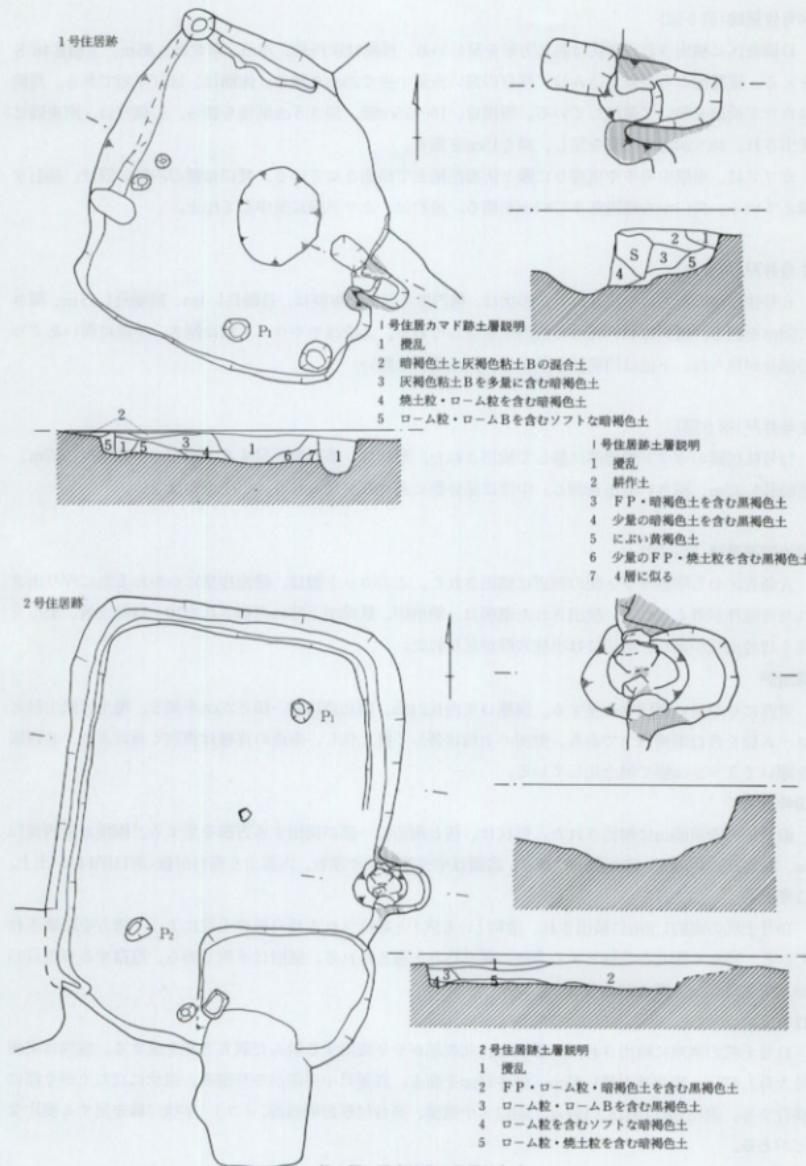
鍛冶炉の南東65cmに検出された。形状は、西と南辺の一部が突出する方形を呈する。規模は東西長73cm、南北最大長59cm、深さ44cmを測る。底面は中央部がやや窪む。内部より高台付碗(第11図14)が出土。

11号土坑

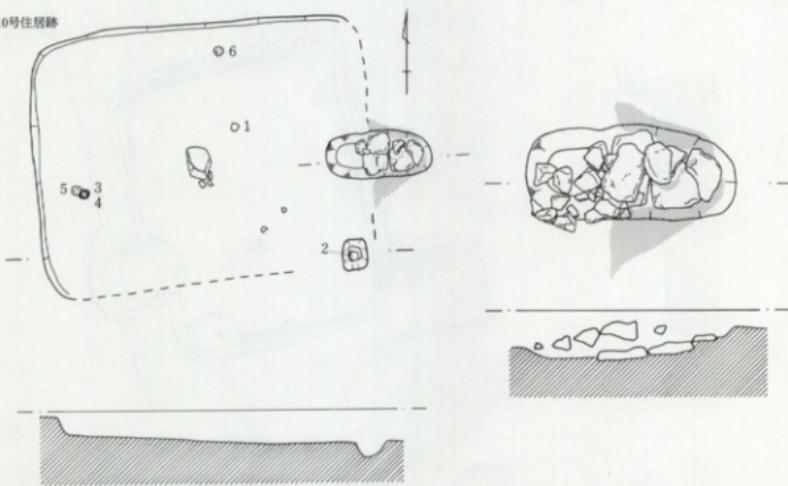
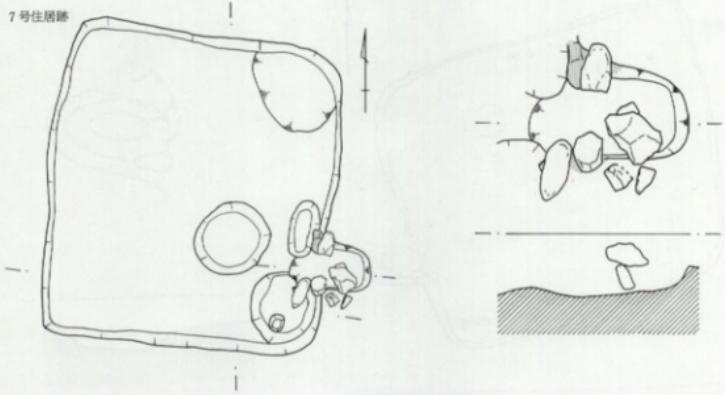
10号土坑の南約1.8mに検出され、通称「いも穴」と呼称される長方形の土坑によって南方を破壊されている。恐らく南北を長軸とする方形の掘り込みと考えられる。底面は平坦である。残存する東西長55cm、南北長40cm、深さ26cmを測る。

12号土坑

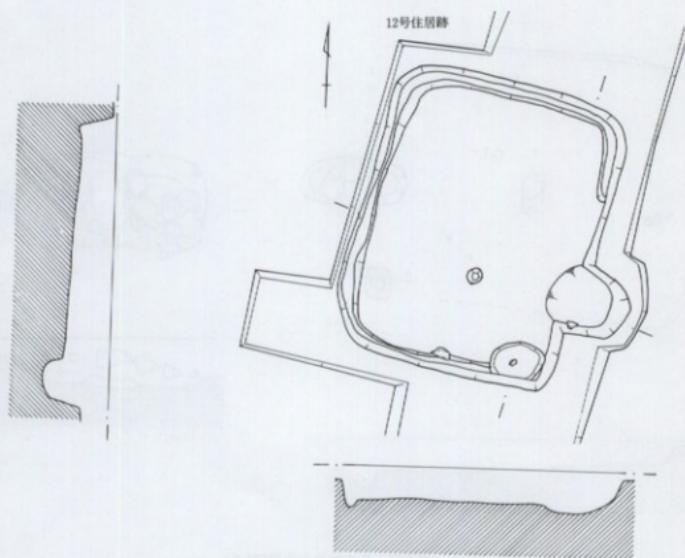
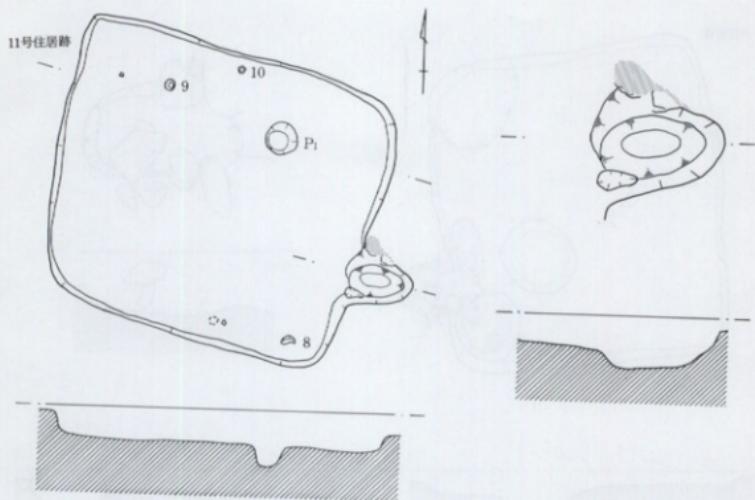
11号土坑の南東に検出された。形状は、北東部がやや突出する歪んだ隅丸方形を呈する。規模は東西最大長2.67m、南北最大長1.95m、深さ24cmを測る。底面は中央部がやや窪み、皿状に立ち上がり部に移行する。遺物(第11図15、16)は、羽口・小型甕、高台付瓶形須恵器、「コ」字状口縁を呈する甕片などがある。



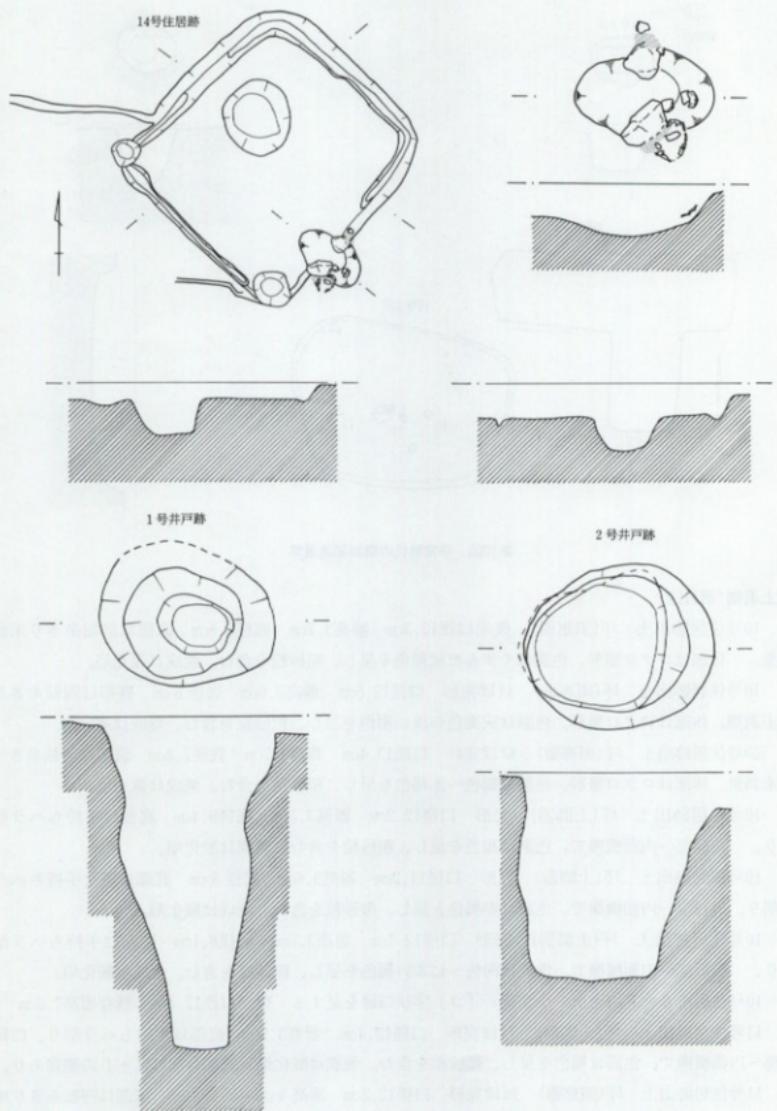
第6図 平安時代の住居跡(1)



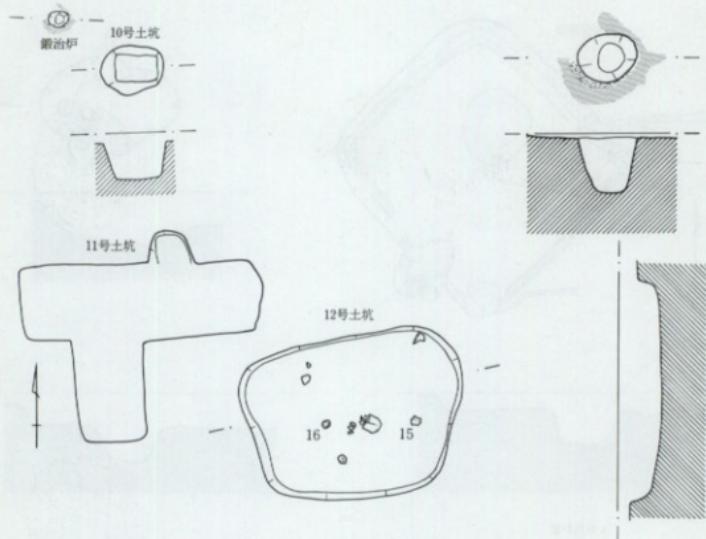
第7図 平安時代の住居跡(2)



第8図 平安時代の住居跡(3)



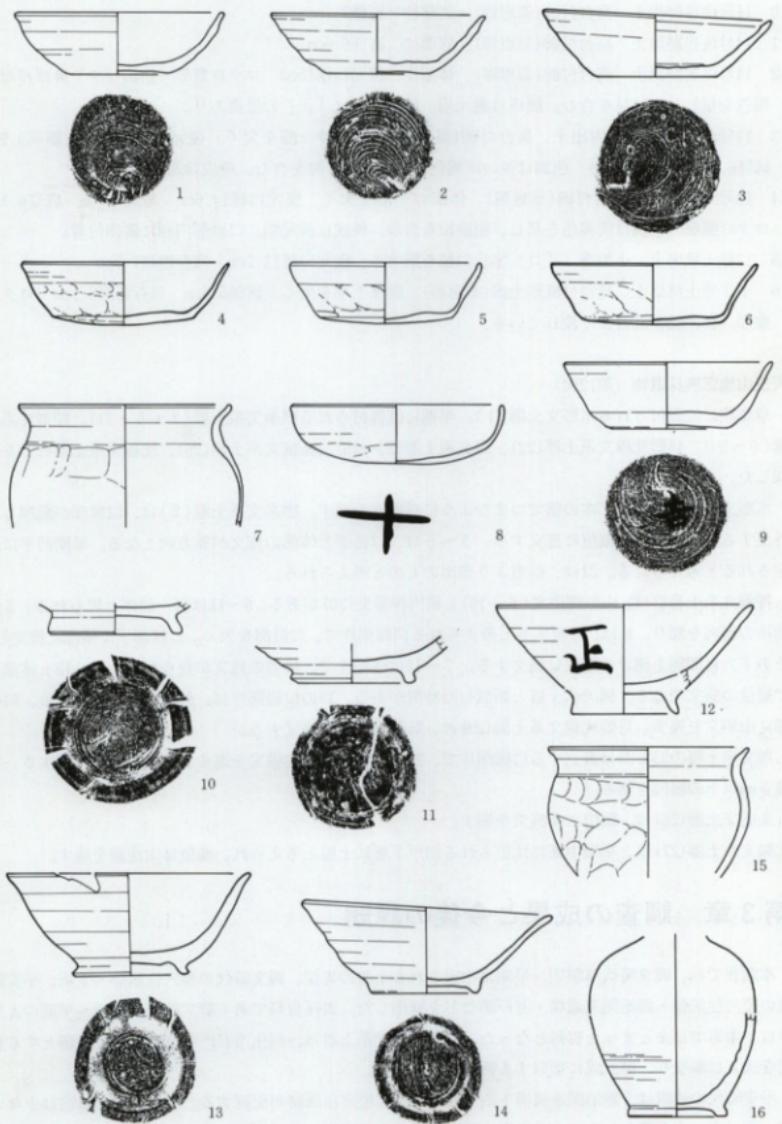
第9図 平安時代の住居跡、井戸跡



第10図 平安時代の鍛冶関連遺構

出土遺物(第11図)

- 10号住居跡出土 坯(須恵器) 復元口径12.3cm 器高3.7cm 底径5.8cm 底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調はくすんだ灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。
- 10号住居跡出土 坯(須恵器) ほぼ完形 口径12.5cm 器高3.6cm 底径6cm 底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色～淡い褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。
- 10号住居跡出土 坯(須恵器) ほぼ完形 口径13.4cm 器高3.7cm 底径7.2cm 底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は褐色～赤褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。
- 10号住居跡出土 坯(土師器) 完形 口径12.2cm 器高3.7cm 底径8.4cm 底部は手持ちヘラ削り、口縁部～内面横撫で。色調は褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。
- 10号住居跡出土 坯(土師器) 完形 口径11.2cm 器高3.6cm 底径8cm 底部は雑な手持ちヘラ削り、口縁部～内面横撫で。色調は赤褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。
- 10号住居跡出土 坯(土師器) 完形 口径12.1cm 器高3.7cm 底径8.1cm 底部は手持ちヘラ削り、口縁部～内面横撫で。色調は褐色～ぶい褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。
- 10号住居跡カマド内出土 小型甕 「コ」字状口縁を呈する 復元口径12.4cm 残存器高7.2cm
- 11号住居跡出土 坯(土師器) ほぼ完形 口径12.4cm 器高3.5cm 底部は手持ちヘラ削り、口縁部～内面横撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。底部外面に「+」の墨書きあり。
- 11号住居跡出土 坯(須恵器) ほぼ完形 口径12.2cm 器高4cm 底径7cm 底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。底部外面に「吉」の墨書きあり。



第11図 平安時代の出土遺物

- 10 11号住居跡出土 高台付碗(須恵器) 底部片 底径7.7cm
- 11 14号住居跡出土 高台付碗(須恵器) 底部片 底径6.6cm
- 12 14号住居跡出土 高台付碗(須恵器) 体部片 復元口径15cm ロクロ整形 色調はやや黄ばんだ灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。体部外面に「正」の墨書き。
- 13 14号住居跡カマド内出土 高台付碗(須恵器) 体部の一部を欠く 復元口径14.3cm 器高5.9cm 底径6.7cm ロクロ整形 色調は淡い灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。
- 14 10号土坑出土 高台付碗(須恵器) 体部の一部を欠く 復元口径14.6cm 器高5.1cm 底径6.1cm ロクロ整形 色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。口縁部内面に鉄滓付着。
- 15 12号土坑出土 小型甕 「コ」字状口縁を呈する。復元口径11.7cm 残存器高7.7cm
- 16 1・2号土坑出土 高台付瓶形土器(須恵器) 胸部上半を欠く 底径5.8cm 残存器高6.1cm ロクロ整形 自然釉が高台まで流れている。

天王山地区表探遺物（第12図）

草創期に位置付される爪形文土器(1)、早期に位置付られる撚糸文系土器(2～5・21)、押型文系土器(6～20)、貝殻沈線文系土器(22)、無文系土器(23～25)、条痕文系土器(26)、沈線文系土器(27)を表探した。

爪形文土器(1)は、二本の指でつまむように爪形文を施す。撚糸文系土器(2)は、口唇部が肥厚して外反する。口唇部から縦位に施文する。3～5は、口唇部と体部の施文が異方向となる。早期前半に比定されると考えられる。21は、前者より後出のものと考えられる。

押型文系土器群は、山形押型文(6～19)と楕円押型文(20)がある。6～11は同一個体と思われる。5mm前後の器肉を測り、6は、外反すると考えられる口縁部片で、口唇部を欠く。口縁部下に横位に施文し、その下方に間隔を開けて縦位に施文する。7～11は体部片で、縦位の施文が見られる。12～18も体部片で縦位の施文である。樋沢式土器と類似した特徴がある。19の口縁部片は、外面が剝離している。口唇部に山形文を施す。貝殻沈線文系土器(22)は、貝殻腹縫文を施文する。

無文系土器の23と24は直立する口縁部片で、23は口唇部下に沈線文を巡らして口唇部を区画する。25は5mm以下の器肉を測る。

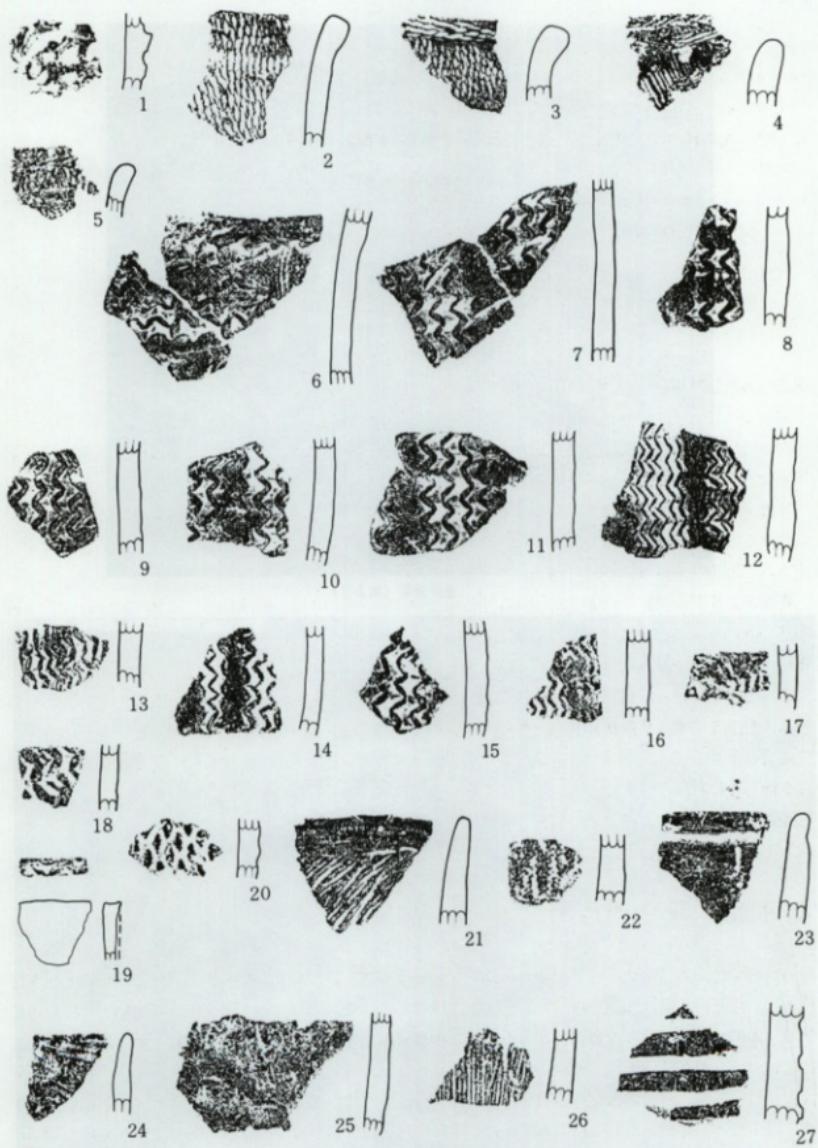
条痕文土器(26)は、縦位に条痕文を施す。

沈線文系土器(27)は、早期中葉に比定される田戸下層式土器と考えられ、横位に太沈線を施す。

第3章 調査の成果と今後の課題

本調査では、縄文時代草創期～早期に比定される土器の表探、縄文時代の竪穴住居跡・土坑、平安時代の竪穴住居跡・鍛冶関連遺構・井戸跡などを検出した。表探資料である縄文時代草創期～早期の土器片は、本町ではまとまった資料となった。特に押型文系土器は、桐生市普門寺遺跡を標式遺跡とする普門寺式とは異なり、樋沢式に類似する特徴が見られる。

平安時代の遺構は、鍛冶関連遺構を取り巻くように竪穴住居跡が配置する。特出すべき遺物は少ないが、正・吉・十と書かれた3点の墨書き土器がある。出土遺物から「コ」字状口縁を呈する甕片や羽釜片から9世紀後半を主体とする時代が考えられる。



第12图 天王山地区表采遗物



1 遺跡全景（南より）



2 A 調査区全景



1 試掘風景（西より）



2 1号住居跡



3 1号住居カマド跡



4 2号住居跡



5 2号住居カマド跡



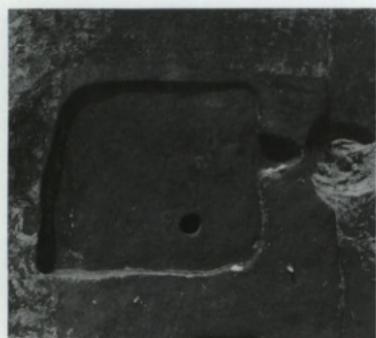
6 5、6号住居跡



1 10号住居跡遺物出土状況



2 10号住居跡環出土状況



3 1号住居跡



4 12号住居跡



5 鐵治開連



6 12号土坑遺物出土状況

報告書抄録

フリガナ	アサミ
書名	浅見遺跡
副書名	団体営日光道東地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II
編著者名	山下歳信
編集機関	大胡町教育委員会
編集機関所在地	〒371-02 群馬県勢多郡大胡町河原浜483番地
発行年月日	1995年3月30日
遺跡所在地	群馬県勢多郡大胡町大字河原浜字浅見1299番地外
調査期間	平成5年11月～同年12月
調査面積	2,500m ²
調査原因	土地改良
所取遺跡名	浅見
種別	縄文時代・平安時代
主な遺構	縄文時代竪穴住居跡2軒・土坑9基 平安時代竪穴住居跡14軒・井戸跡2基・鍛冶関連
主な遺物	縄文時代草創期～後期土器片 平安時代土師壺・須恵器壺・土師甕・羽口
特記事項	縄文時代草創期～早期土器片 平安時代墨書き土器3点



浅見 遺跡

団体営日光道東地区土地改良総合整備事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

平成7年3月30日発行

編集 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発行 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

〒371-02 群馬県勢多郡大胡町河原浜483

TEL 0272-83-7141

印刷製本 朝日印刷工業株式会社